

## ◆ 今週のコメント

- ・ インフルエンザの定点当たり報告数は、0.43(29例)となっています。
- ・ 水痘の定点当たり報告数は、1.44(59例)で、本年度で最も多くなっています。年齢階級別構成割合は、1歳が22.0%(13例)と最も多く、次いで4歳が20.3%(12例)となっています。
- ・ 流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、0.66(27例)で、第4週以降、過去5年平均値を上回る状態が続いています。

## ◆ 今週のトピックス:<手足口病>

手足口病は、この時期としては多くの報告がありました。定点当たり報告数は、0.76(31例)で、本年度最も多くなっています。詳細をトピックス(3枚目)に掲載しています。

## ◆ 特集:RSウイルス感染症

RSウイルス感染症は、例年よりもピークに遅れが見られ、3月に入ってから報告が続いています。病原体情報と併せて、詳細を特集(4枚目)に掲載しています。

## ◆ 発生状況

### 全数報告の感染症

- ・ 二類:結核 8例(肺結核 3例, 肺外結核 3例, 無症状病原体保有者 2例), (喀痰塗抹陽性 なし)  
【1月以降の累積報告数 56例(肺結核 34例, 肺外結核 13例, 無症状病原体保有者 9例), (喀痰塗抹陽性 12例)】

### 定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	0.43	29
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	6.68	274
	② 水痘	1.44	59
	③ 手足口病	0.76	31
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.73	30
	⑤ 流行性耳下腺炎	0.66	27
眼科	流行性角結膜炎	0.10	1

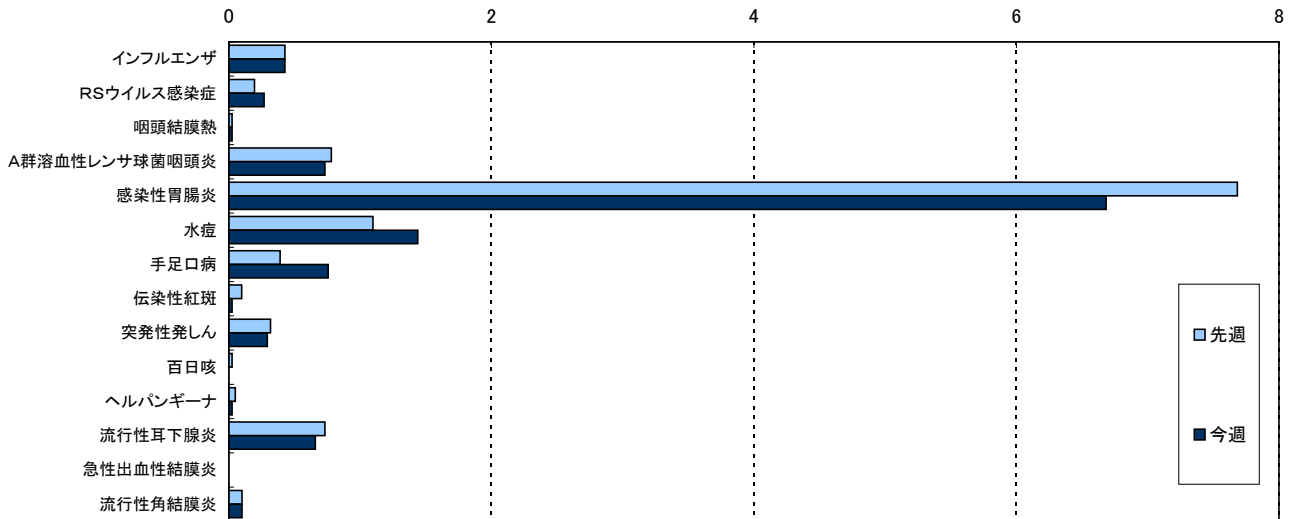
## 【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス:<手足口病> / 特集:RSウイルス感染症

(注) 京都市のデータは、平成22年3月18日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。  
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。

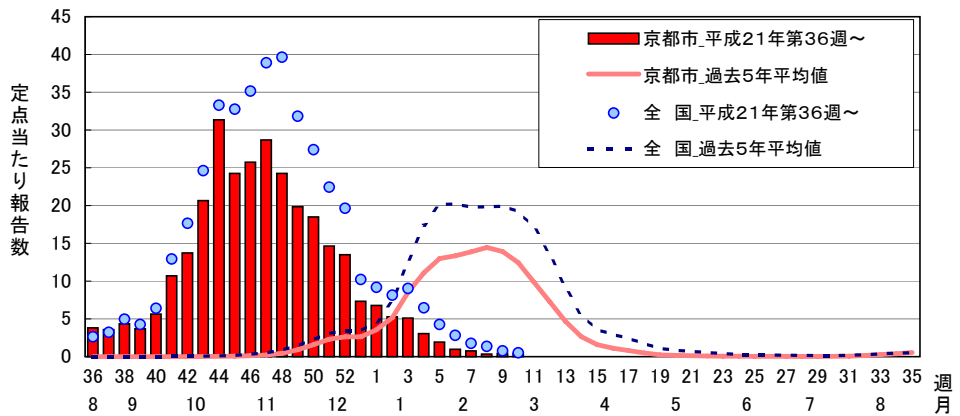
# ◆ 発生状況の概況グラフ

## 1 今週(第10週)と先週(第9週)の定点当たり報告数の比較



## 2 インフルエンザの推移

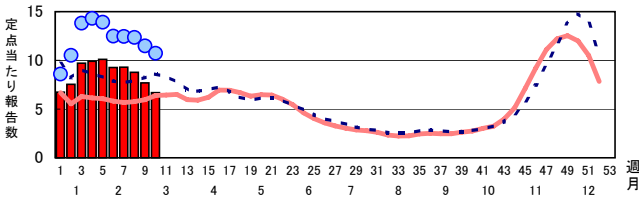
週	報告数(例)
第6週	66
第7週	52
第8週	23
第9週	29
第10週	29
累積報告数 (第36週以降)	20,356



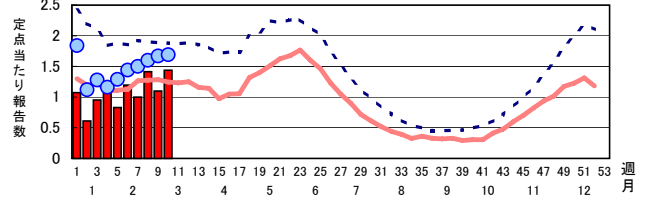
## 3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>

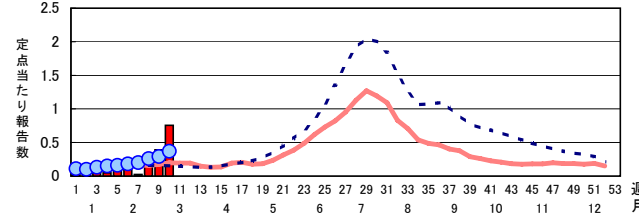
1 感染性胃腸炎



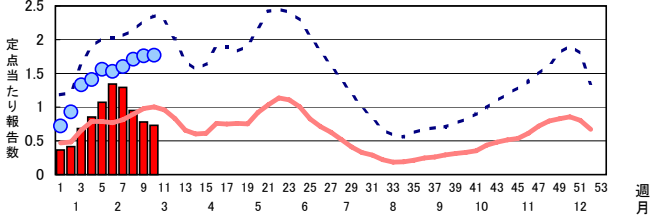
2 水痘



3 手足口病

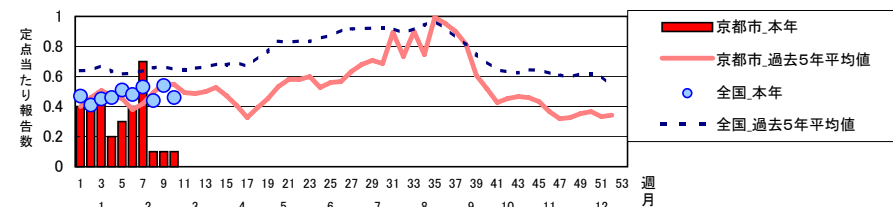


4 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎



<眼科定点>

流行性角結膜炎



## 第10週(3月8日～3月14日)トピックス: <手足口病>

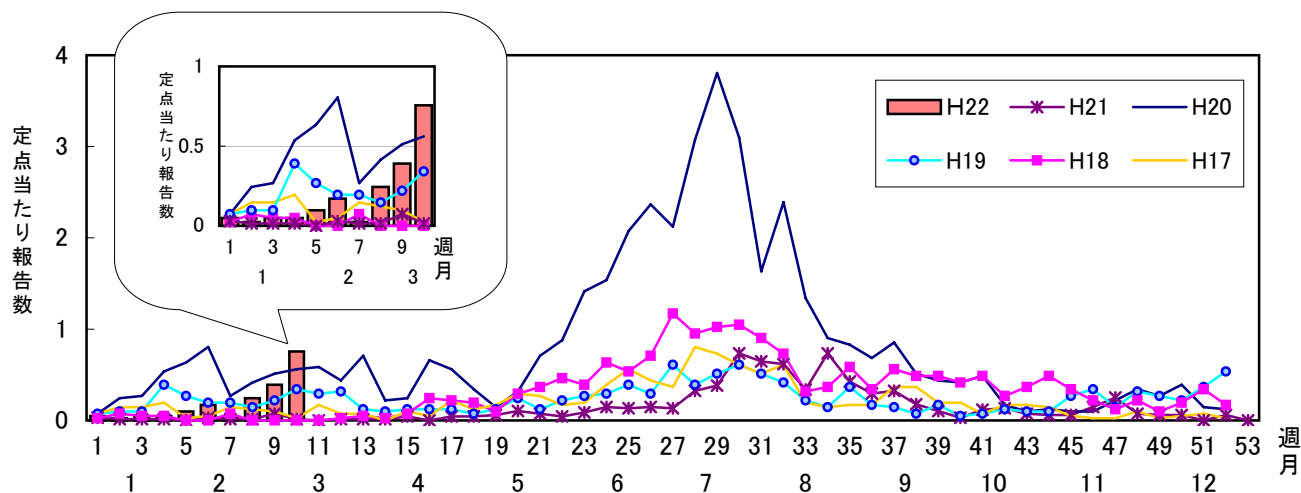
手足口病は、この時期としては多くの報告がありました。定点当たり報告数は、0.76(31例)で、本年度で最も多くなっています。

年齢階級別にみると、「2歳」、「1歳」の順に多く、1歳及び2歳で、58.1%を占めています。

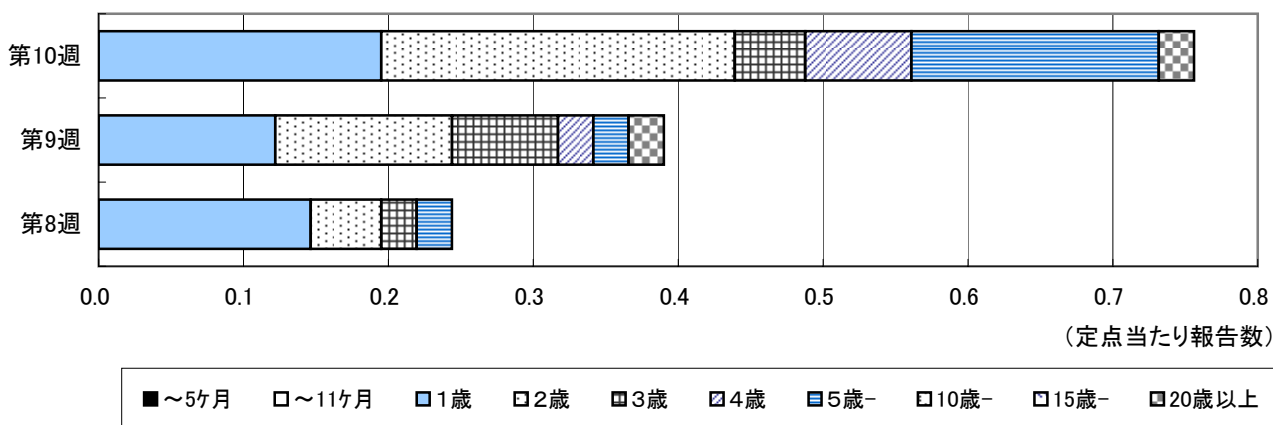
行政区別にみると、11行政区中、6行政区で報告があり、南区、伏見区の順に多くなっています。

本年、京都市衛生公害研究所で検査を実施した手足口病の検体からエンテロウイルス71型(EV71)が1例検出されています。EV71は、脳幹脳炎など重篤な中枢神経合併症の発生率が他のウイルスより高いことが知られており、注意が必要です。

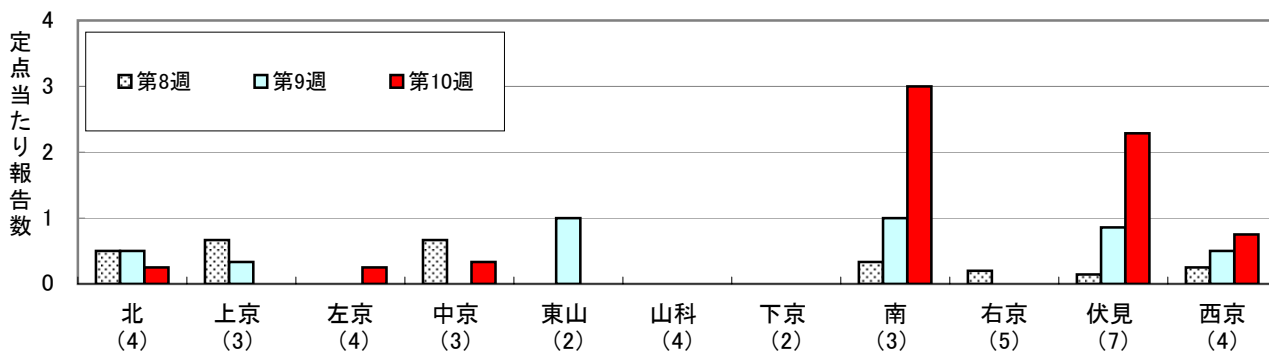
本市の定点当たり報告数 推移



年齢階級別定点当たり報告数の推移



行政区別定点当たり報告数の推移



## 特集:RS ウイルス感染症

RS ウイルス感染症は、平成15年11月から、感染症発生動向調査における五類感染症の小児科定点把握疾患に追加され、京都市では41の医療機関、全国では約3,000の医療機関から毎週、報告されるようになりました。

診断は、迅速診断キットによる抗原の検出や、細胞培養によるウイルス分離（RS ウイルスに感染した細胞は特徴的な変性を示す。図1、図2参照）、中和反応及び補体結合反応を含める血清抗体の検出などにより確定します。



図1) 正常FL細胞

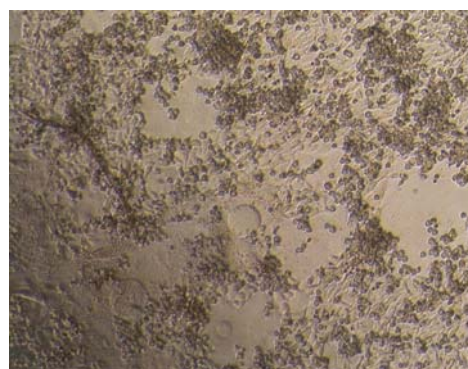


図2) RS ウイルス感染FL細胞の変性

医療現場で最も普及している迅速診断キットは、入院患者のうちRS ウイルス感染症を疑う場合の使用に限り健康保険による療養の給付の対象とされ、外来での確定診断では制限されるため、実際の患者数は、報告数よりかなり多いことが予想されます。

今シーズン（平成21年第36週～平成22年第9週）は、例年よりもピークに遅れが見られ、3月に入ってから報告が続いており、流行はもうしばらく続くと考えられます。（図3参照）

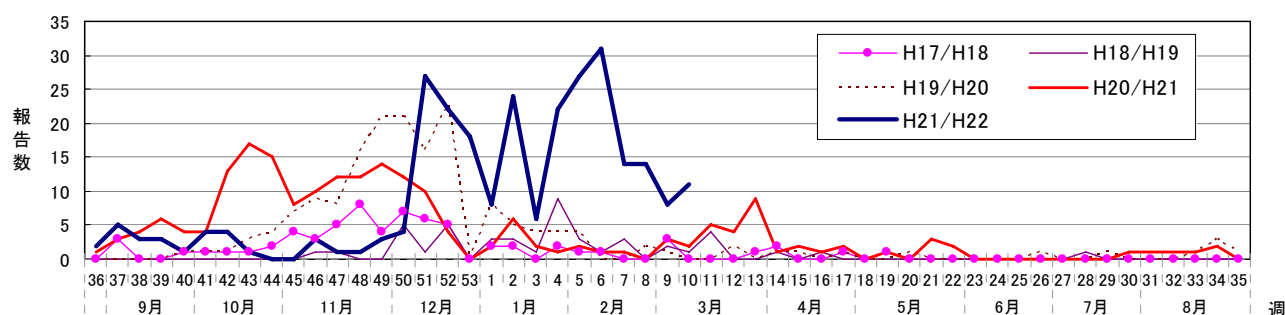


図3 本市の報告数の推移（5シーズンでの比較）

平成21年1月から平成22年1月までに、市内3箇所の病原体定点医療機関から京都市衛生公害研究所に搬入された検体のうち、RS ウイルスが分離・同定されたのは18株で、すべて鼻咽頭拭い液の検体からでした。臨床診断名は、かぜ症候群が16件、RS ウイルス感染症が2件でした。年齢階級別では、1歳が最多で6件、続いて2歳が4件、1歳未満及び3歳が3件となっています。

保育所、家族間での感染が各1件あり、注意が必要です。

京都市衛生公害研究所ホームページの下記のURLに、情報を掲載しています。

- ・ 「RS ウイルス感染症について」 <http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000076939.html>
- ・ 「インフルエンザ・小児感染症の疾患別推移グラフ」 <http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000065390.html>
- ・ 「京都市感染症週報」 <http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000074152.html>